

視察調査報告書

| | |
|--------|--|
| 委員会名 | MICE検討特別委員会 |
| 参加者 | 委員長 杉浦 久直 副委員長 酒井 正一 委員 田口 正夫 三塩 菜摘 野本 篤 青山 晃子 鈴木 英樹 三宅 健司 築瀬 太 |
| 視察日時 | 令和4年5月10日（火）13:30～15:30 |
| 視察先・概要 | 石川県金沢市 人口：459,549人 世帯数：208,704世帯 面積：468.79k㎡ |
| 視察項目 | 金沢市文化スポーツコミッションについて |
| 視察概要 | <p>1 設立経緯</p> <p>平成28年に金沢市文化スポーツ局オリンピック関連事業推進室により、さいたま市、仙台市等の各スポーツコミッションの調査を開始し、平成29年上半期に設立検討委員会を発足（スポーツ協会、芸術文化協会、観光協会、大学）、同年下半期に設立準備委員会を発足（検討委員会に加えて、商工会議所、経済同友会、ホテル懇話会、旅館ホテル協同組合、コンベンションビューロー）させた。</p> <p>その後、平成30年7月1日に金沢文化スポーツコミッションが観光協会内の独立部門として設立され、代表・副代表は民間から登用している。</p> <p>特筆すべき設立要素は、「スポーツも文化であり将来世代に多様な可能性を生み出す」という市長の強い意志である。</p> <p>2 組織運営状況</p> <p>(1) 組織概要</p> <p>代表（1名）、副代表（1名）、統括マネジャー（1名：市OB）、マネジャー（2名：市から出向）、庶務（1名）</p> <p>(2) 予算規模</p> <p>令和3年度予算 70,000千円（スポーツコミッションのみ） 内訳：誘致事業費12,200千円、事業委託費23,600千円、運営費補助34,200千円</p> <p>※なお、平成30年から令和2年の3か年は民間スポンサーあり（年額3,000千円）</p> <p>(3) 活動状況</p> <p>大会誘致件数 平成30年3件、令和元年22件、令和2年30件、令和3年40件</p> <p>実施件数 平成30年3件、令和元年19件、令和2年7件、令和3年17件</p> |

| | |
|--------------------------------------|--|
| | <p>なお、令和4年については、4月現在の誘致件数は43件である。</p> <p>(4) その他</p> <p>誘致から大会前の情報発信、大会当日のおもてなし、大会後のフォローまで、全て6人のスタッフによる自主企画である。</p> <p>3 ユニークな誘致開催制度</p> <p>一般的なスポーツコミッションは、補助金・奨励金の支払先が主催団体のみであるところ、金沢文化スポーツコミッションは、主催団体（中央団体）に補助金扱いで補助額の3分の1を、主管団体（地元団体）に奨励金扱いで補助額の3分の2を補助しており、これにより地元の競技団体による誘致につながっている。</p> |
| <p>所 感</p> <p>※視察しての感想や岡崎市への提言など</p> | <p>・観光地として確立されている金沢市が、ホテルマン出身の平氏の経験や人脈を生かし、前泊や、もう一泊してもらうなど地の利の活用、また補助金により地元団体にもインセンティブを与えるなど、練り上げた戦略に大変感心した。本市としても、大河ドラマ「どうする家康」が控え、本市への注目度が上昇している今、まずは「おもてなし」の観点から人材の育成と確保が必要と考える。</p> <p>・金沢市においては、強力なリーダーシップをとる人材があることで、成果が上がっていると感じた。また、弓道の大会開催時に茶道とのコラボでお茶席を開催する等、アイデアに富んだ活動を活発に行っていることが分かった。文化スポーツコミッションを進めていく上で、一番にはそれに関わる関係者の強い意志が必要だが、それを理解し、協力する行政と一般市民の力が不可欠と感じた。本市においても、そのようなことを視野に入れ活動していかななくてはならないと考える。</p> <p>・金沢文化スポーツコミッション代表の平氏は、県外出身でホテルの支配人を経験してきた民間の人材である。ホテルマン時代に築き上げた人脈と、長年観光業界の経営に携わってきた経験による三方よしのアイデア・企画力が、短期間で確実な実績を残す経緯につながっていると感じた。また、具体的な政策立案と柔軟な調整・対応力も印象的であった。新型コロナウイルスの影響で様々な事業が中止となる中でも、オンラインでも参加できる金沢にまつわる謎解きなど、自主事業の立ち上げで成果を残している。少人数で経営する中での苦労や成長ストーリーを聞く中で、今後は「新しい人材と新しいチャレンジを形にしていきたい」という発言があったが、そんな思いが、様々な人たちを巻き込んで形にしていく推進力につながっていると感じた。</p> <p>・金沢という歴史文化観光が確立されているなか、スポーツMICEを有効に活用し、伝統工芸品のPR発信も上手く行われている。大会の前後に企画を用意して、宿泊による消費額や経済効果を意識した取り組みであった。また、ユニークな誘致開催制度として、主管する地元団体へ奨励金扱いとして3分の2を交付することによって、自由度が高まり地元団体が開催することに意欲的になり、かつ、積極的に誘致活動を行うことにつながると考える。本市としても参考にして取り入れてはどうか</p> |

と考える。

・水引のトロフィーをはじめ、若手スタッフに企画を考える機会を与えるなど、スタッフ育成がうまい。競技を理解した上でのコンテンツ提案、大会参加者層に合わせたコンテンツの提案など、一律ではないきめ細やかな観光体験企画が消費活動につながっている。誘致支援奨励金は、地元競技団体に率先して誘致活動をしてもらういい仕組みである。それだけで終わらず、その後の自立についての仕掛けも合わせて用意されており、今後の実績が気になる。大会参加者に金沢を意識し続けてもらう公式LINEの仕組みも面白い。観光資源の多いまちだけあって、スポーツツーリズムだけでなく、「どうする家康」の活用推進にも生かせる学びがたくさんあった。

・今回視察し、地域団体での範囲であるが、民間出身の平会長の強い意志と民間ならではの発想により、先進的なスポーツMICEの取組であると感じた。特に、五つの視点で参考になった。①当初「時の市長の強い意志」で推進され、「金沢市スポーツ文化推進条例」の条項内に反映している。②組織としては、観光協会内の一部であるが独立した組織となっている。③組織のトップは民間登用で市長自ら声掛けし、運営に対して「スポーツはどこでやっても変わらない」運用次第で変わる視点で取り組んでいる。④その地域の文化活動と連携しまちの活性化を図る。キーワードは、「もの消費からこと消費へ」。⑤交付内容については、主催団体には補助金、地元団体には誘致開催奨励金とし、頑張っている団体を後押しする考え。⑥組織構成は6人と少数精鋭であるが、大会等の誘致は競技団体が自ら動くことで活性化につなげている。本市も将来的にはこれらの取組や、プロや国際大会などのスポーツ大会も考慮していけるように提言したいと感じた。

・元ホテルマンをスポーツコミッションの代表に登用して、民間感覚で民間手法を全面に出しながら事業を進めてきており、どの事業も新しい発想で多くの団体などを巻き込みながら成果を収めてきている。それは職員にも伝播し代表者から学んだことに職員自身がもう一工夫させた事業内容を創ることもつながっている。また、何かあった場合にも臨機応変に対応している点もすばらしいと感じた。一方で代表者は経験と知識そして指導力も求められ、人選が難しいことと職務に見合った賃金が必要ではないかと感じた。

・金沢文化SCの平代表の人脈と強力な推進力が実績につながっていると感じた。民間ならではのおもてなし視点で金沢ブランドをうまく活用し、金沢ファンづくりや前後泊による消費拡大などに結びつけているのは、なかなか他市ではまねのできないところだが、「どうする家康」とのコラボなど岡崎ならではの歴史観光資源との連携は欠かせないと感じた。また、開催費補助金と誘致支援奨励金とを使い分け、地元競技団体にもインセンティブを与えることにより、上位団体に対して積極的に誘致を図っているなど、制度的にもたいへん参考になった。

委員長の総括

金沢市文化スポーツコミッションの準備段階から参画し、設立後は代表として一貫して関わってきた平八郎氏に話を聞くことができた。金沢市にスポーツを通じて外から人を呼び込むスポーツツーリズムの推進役として、金沢文化スポーツコミッションは平成30年に設立された。当時の金沢市は北陸新幹線の開業後、行政と民間とで、一体的に観光誘致に取り組む中、将来的なホテル客室の供給過剰も予想され、当時の市長の強い意向により求められたものであった。金沢市の強みである文化の金沢ブランドと、スポーツとを組み合わせることで、地域の活性化と経済波及効果を狙うもので、適切な制度と予算の裏付けにより、補助金額の191倍の経済効果をもたらす事業となっている。コミッションは観光協会内の独立部門として、民間主導での組織運営に行政がうまく関わり、元ホテルマンである平代表の能力を上手に発揮させることができたことが、成功の秘訣とも言える。また、制度としての地元主管団体への奨励金や、金沢の歴史、文化、資源を上手に活用した様々な魅力化も成功要因であろう。コロナ禍もあり、誘致件数の増に対し、実施件数は差が生じてしまっているが、今後のウィズコロナ、ポストコロナでの地域経済の発展には、より重要性が増してくると感じられる。また当日議会事務局の受入担当であった桜田氏も、昨年度までコミッションに出向していたということで、現場の話も聞くことができた。

岡崎市としては、観光の産業化という面、また都市のブランド化という面で、まだまだ金沢市のようにいかない部分もあるのが実情であるが、今後「どうする家康」を生かし、「ものづくり」以外の産業も育成していく、観光の産業化、M I C E誘致の推進は重要な取組であり、スポーツと文化を組み合わせた金沢市の取組はとても参考になると感じた。一方、制度は見習い取り入れることはできるが、こうした取組を推進していくためには、首長の強い意志と、民間の優秀な人材が必要であり、そこが大きな課題と言えるかもしれない。